

まちだゆかりの作家 — 若林 奮

*Series “Artist in Machida”,
WAKABAYASHI Isamu*

2020 年 9 月 16 日 (水) ~ 12 月 23 日 (水)

本展示は、2016 年度から開催している町田市にゆかりのあるアーティストを紹介するシリーズ企画です。今回は、現在の町田市原町田出身の彫刻家・若林奮（わかばやし いさむ、1936-2003）を取り上げます。

若林は 1959 年（昭和 34）に東京藝術大学彫刻科を卒業後、早くから受賞を重ね、ヴェネツィア・ビエンナーレにも出品、若くして評価を確立した、戦後日本を代表する彫刻家のひとりです。鉄を中心に、銅や鉛、硫黄、木などの素材を使って、地形や植物、気象、大気の状態などへの深い自然観と、空間や時間への強い意識にもとづく思索的な作品を制作したことで知られます。

版画も重要な表現手段で、生涯に 700 点を超える作品を制作しました。銅版画が中心ですが、リトグラフや木版、さらには独自の技法を試みるなど、その制作姿勢は自由で、表現も多岐にわたっています。

本ミニ企画展では、1970 年代から 90 年代にかけて制作された『ノート・鮭の尾鰭』『BLACK COTTON』『GRASS』など 5 種類の版画集を中心に、約 40 点の版画を展示して、このような若林奮の仕事を振り返ります。

◇出品リスト *サイズはタテ×ヨコ mm

1 版画集『ノート・鮭の尾鰭』（14 点）

1978 ドライポイント

Note : A Salmon's Tail Fin (14 prints)

Drypoint

- 1 142×9
- 2 149×92
- 3 150×92
- 4 138×90
- 5 146×182
- 6 149×182
- 7 148×182
- 8 150×182
- 9 148×182
- 10 148×182
- 11 149×182
- 12 149×182
- 13 150×182
- 14 146×182

博物館で見た、展示ケースに入った多数の旧石器時代の岩盤や骨片につけられた刻線に触発されて制作した作品集です。「鮭の尾鰭」とは、その時に見た、20 本前後の刻線がつくる形から浮かんだイメージであったようです。また若林は、石器によって刻線の深さや長さが違っていることから、それらが出土した環境や場所へと想像を飛躍させ、自由に思索しています。石器の刻線のように銅の板に直に線を刻んで、自分の思索をかたちにしたのが本版画集であったと考えられます。

2 版画集『ノート・鮭の尾鰭 補遺

水のとどまるどころ』（5 点）

1978 ドライポイント

Supplements of “Note : A Salmon's Tail

Fin”, The Site Where Water Remains

(5 prints)

Drypoint,

- 1 I 180×100
- 2 II 149×91
- 3 III 171×70
- 4 IV 227×159
- 5 V 148×91

3 版画集『地方に於ける小気象』（7 点）

1977 ドライポイント 300×365

Atomospheric Phenomena at Local Area

(7 prints)

Drypoint

- 1 大陰影 I
Big Shadow I
- 2 斜面をこえる砂
Sand going over a Slope
- 3 大陰影 II
Big Shadow II
- 4 斜面
A Slope
- 5 崖の凹
A Hollow on a Cliff
- 6 振動尺・水滴
Oscillating scale/ Waterdrops
- 7 五地平線
Five Horizons

本版画集には、ある異なる空間や物を真横から見た時と、真上から見た時の見え方を同じ画面で組み合わせた作品が収められています。たとえば《大陰影 I》は、若

林が少年時代に訪れたことのある相模原の陸軍病院の長い廊下の空間と、画面左に機首、右側に尾翼を持つ飛行機の平面図を組み合わせた図と見ることができます。彫刻作品を地表面に設置したときに形成される空間について思索する、彫刻家の若林ならではの版画作品といえるでしょう。

4 鮭の振動尺 I
1978 ドライポイント、エングレーヴィング
180×1402
Oscillating Scale of Salmon, I
Drypoint, Engraving

5 版画集『BLACK COTTON』(9点)
1989 リトグラフ 1000×755
-1 ~ -9
BLACK COTTON (9 prints)
Lithograph

題名に付された COTTON はそのとおりの綿のことです。若林は彫刻でも《綿についての記憶》(1984) や《綿を含む三角形》(1984) など、「COTTON (綿)」を題名につけた作品を制作していますが、その理由は、生家が綿屋であったことと関係がありそうです。若林の記憶のなかにある綿とは、本作品集に描かれたような大きな塊であったと思われます。その塊が BLACK であるのは、表面が焼けて黒くなった状態をイメージしていたのかもしれませんが。本来、軽くて柔らかい綿が、まるで彫刻のように、重量感のある「物体」として描き出されています。

6 版画集『GRASS』(3点)
1993 リトグラフ 935×754
-1 ~ -3
GRASS (3 prints)
Lithograph

若林は鉄を中心に、銅や鉛、硫黄、木などの自然界に存在する素材を使って、地形や植生、気象、大気の状態などへの独自の自然観を作品に表現した彫刻家です。リトグラフの制作に用いられるクレヨンで描画された本作品も、若林の自然観が表された作品とみることができません。硫黄のような黄色地の上に、濁りのない青色で描画を加えてつくられた空間は、地表から沸き出る水蒸気が空気中に立ち込める状態を表しているように見えます。

◇ 浮世絵展示

月岡芳年
TSUKIOKA Yoshitoshi
『月百姿』より
From the Series, One Hundred Aspects of the Moon
明治 18-25 年 (1885-92)
大判錦絵 *woodblock print*

◆1 期 (9/16-10/16)
はかなしや波の下にも入ぬへし
つきの都の人や見るとて 有子
Ariko (Court lady in Heian period)

大物海上月 弁慶
Moon Above the Sea at Daimotsu Bay: Benkei

吼噓
Konkai (The fox's cry)

◆2 期 (10/17-11/15)
嫦娥奔月
Chang'e Flying to the Moon

石山月
The Moon at Ishiyama

五條橋の月
The Moon at Gojo Bridge

◆3 期 (11/17-12/23)
朝野川晴雪月 孝女ちか子
*Moon of Pure Snow at Asano River:
Chikako, The Filial Daughter*

烟中月
Moon in Smoke

玉兔 孫悟空
Jade Rabbit and Sun Wukong

2020年9月16日
発行：町田市立国際版画美術館
〒194-0013 東京都町田市原町田 4-28-1
<http://hanga-museum.jp/>